Poster Session

Fri. Nov 20, 2026 2:00 PM - 3:00 PM JST | Fri. Nov 20, 2026 5:00 AM - 6:00 AM UTC | ポスター3

Poster Session 6 Early Colorectal Cancer and Endoscopic Treatment 1

座長：樫田 博史（川西市立総合医療センター）

[P6-4] Comparison of the two-sample method and the single-sample method in fecal occult blood testing

*Mio Matsumoto[1] (1. Department of Gastroenterology, Sapporo Cancer Screening Center, Public Interest Foundation Hokkaido Cancer Society)

【背景】2026年３月の第46回がん検診のあり方に関する検討会にて、大腸がん検診の便潜血検査については１回の検査で採取する便を従来の２日分から、１日分に変更とする方針となった。一方、当検診センターでは、便潜血陽性の要精検における大腸内視鏡検査で、大腸がん予防目的として適応病変に対し即日のCold Polypectomy(CP)を施行している。
【目的】自施設での便潜血検査の成績を元に便潜血検査1回法と2回法を比較検討する。
【方法】2025年4月～2026年３月の期間に、便潜血で陽性となり、自施設で精密検査として大腸内視鏡検査を受けた症例に対して、便潜血検査結果が１回陽性群と２回陽性群に分け、それぞれの癌発見率・CP施行率について後方視的に検討した。
【結果】便潜血陽性となり自施設で大腸内視鏡検査を受けた対象者は533例であった。そのうち、便潜血１回陽性群は447例（83.9%）、２回陽性群は86例（16.1%）であった。全体でのがん発見数は９例（1.6%）、内訳は１回陽性群が２例（22.2%）、２回陽性群が７例（77.8%）であった。進行癌は５例で全て２回陽性群であった。また、早期癌４例中２例は２回陽性群であり、大腸癌の78%以上は１回法においても癌の発見に至ったものと考えられた。一方で、10mm以下の腺腫に対し同日CP施行したものは210例であった。内訳は１回陽性群で180例（85.7%）、２回陽性群で30例（14.3%）であった。
【考察】国立がん研究センターによるメタ解析によると、１回法と２回法による大腸がん発見の感度特異度には統計学的な差はなかったとされる。本検討でもそれに類似した結果であった。「がん発見」の観点のみであれば１回法でも問題はないが、クリーンコロンを目指す「大腸がん予防」の観点から考えると、１回法にすることで今回CP施行されたうちの最大８５%がCSの機会を失う可能性がある。
【結語】便潜血検査１回法はがん発見には有用だが、がん予防の機会を減らす可能性がある。

©一般社団法人 日本大腸肛門病学会